浪花口、エーカ？　序章

上口司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
浪花口、エーカ？　序章

【Ｎコード】
Ｎ７９７８Ｊ

【作者名】
上口司

【あらすじ】
相次いだ地震と膨大な借金により経済破綻した日本は、壊滅した東京から大阪へ遷都することに決定。数百年来の出来事に動揺する日本に追い打ちを掛けたのは、政情不安で近隣諸国から雪崩れ込んだ外国人労働者だった。大阪は急速に東アジア随一の国際都市へと発展をとげ、一方でそれは著しい治安の悪化を招いた。
在日沖縄２世の比嘉タケルは、工程師（エンジニア）にして不良（アシバー）。父の死後高校を中退した彼は行くあてのない放蕩生活の挙句、父の友人だったバイク工に拾われてなんとか食いつないでいた。そんな大阪のウマいも

んと懸浮車（ホバースクーター）にしか興味のない彼に、近畿州立大学言語学研究室から、半四カ国語併用者（クアドルプル・リミテッド）の実態調査に協力してほしいとの依頼が舞い込む。しかしそれは彼の長い夏の幕開けでしかなかった。史上初の大阪を舞台にしたＳＦ作品。

（前書き）

大阪の人が読んだら確実に怒る小説ですね、これ（笑）

慶化(けいか)３６年７月２１日
午前８時１５分頃
日本
近畿州大阪府大阪市中央区難波近辺某所――

「朝から何や、お前ら？」
　薄緑色の作業着を纏ったやけに背の高いその若い男は、愛車の前に座り込んでいる集団に声をかけた。

比嘉(ひが)タケルは出勤前の時間帯になると、難波駅近辺に立ち並ぶ屋台や出店で朝食を済ませるのが日課だ。
家で食べても良いのだが、一人暮らしで買い置きも碌にしていない彼は通勤途中にある店に寄っていた。屋台街ではエスニックでも中華でも何でも揃うので、２１歳現役成長期の彼にとって難波は素晴らしい町だった。
そして今日も、今さっき食べ盛りに相応しく三杯の醤油　拉面(ラーメン)を食い終えて、出店の裏にある狭い空き地に停めておいた懸浮車を取りに来た。
懸浮車は現在大阪に広く普及している乗り物の一つで、車体の両脇にジェット発動機(エンジン)を二つ搭載したスクーターのようなカタチをしている。
これはつい最近手に入れたばかりのピカピカの紅い車体を持つ懸浮車で、彼のお気に入りだったが置き場に困って結局その辺に放置したのだった。
彼は満腹感に浸っていた。
そして、やっぱ大阪拉面は好吃(ウマ)い、とか、青葱(ネギ)と面碼(メンマ)が牙(は)に挟まってよう取れん、とか下らないことを考えながら、屋台で買った激安

タコ焼き六個セットを引っ提げて歩いていた。
売り子の声の飛び交う露店の群れを抜けてしばらく行くと、やがて警戒線（トラロープ）が貼り廻らされた空き地が見えた。
しかし何やら様子が異常（おか）しい。入り口付近の道路沿いに人だかりができている。
どうやら五、六人のヤーさんが、彼の懸浮車を物色しつつ、仲良く井戸端会議しているらしい……。

この辺は正直言って治安もよくないし、こういう光景は珍しくない。
難波はかつて「ミナミ」の中心、そして大阪の代表的な町の一つとして有名だったという。しかしそれはもう昔の話だ。
難波はこの数十年で、溢れかえるようになった外国人労働者の存在によって激変した。
現在の難波の持つ、もう一つの顔――
それは、彼らの多くが居住している地域――大正区・西成区・天王寺区・生野区など――の中心街としての顔である。
彼らが受け皿として選んだのは、元より在日韓国人で知られる生野区などを含め大阪のミナミに多かったが、難波は中央区の外れに位置し言わばその皿の縁に当る場所だった。
政府関係者から「大阪特別行政区」とも揶揄されたこの地域は、一面では大阪の発展を支えてきた外国人たちが肩身を寄せ合い暮らしてきた居住区でもあった。
だがそこは同時に、大阪五輪の時も建設予定地から立ち退かない住民がいたり、不法滞在者の居留地や麻薬・売春等犯罪の温床になっていたりした。やがて地元住民からも「鉄壁のスラム」と称され、「あそこは外国」「治外法権が働いている」とまで噂されるようになった。

しかしタケルにとってここは生まれ育った場所だ。
外国人の友達も沢山いるし、恐怖を感じるような場所ではないのだ。

彼は少々迷ったが――いずれにせよ顔だけでは何人か分からないので――同業者かどうかを確かめるため話し掛けることにした。
「朝から何や、お前ら？　歩道の真ん中でウンコ座りして、通行人の碍道（ジャマ）やろ？」
彼は買ってきたパック片手に、爪楊枝に差したタコ焼き一粒をもう一つの手で握りしめつつ話しかけた。
幸い彼は身長が１８０？以上ありガタイは好かったし、脳袋（あたま）も壊（わる）かった。
「お前、どこの誰や？」
「やかましいわ、このボケ」
案の定突き刺さる冷たい目線と共に口々に言い返された。サングラス越しにこちらを睨みつけた者もいた。
やっぱ勢いだけでつっけんどんに聞いたのはマズかったか……。彼はむしゃむしゃとタコ焼きを咀嚼しつつも、少し反省した。
だが「喧（かしま）さん！」と言わない辺りを見ると、こいつらはウチナー系ではないらしい。
そんなら恐喝（ジンカメー）か？　しかし彼は、自分が弱そうに見えるわけない、と信じ込んでいたので、それも奇妙に感じた。
「な～、退いてくれへん？　それ我（オレ）のなんやけど」
彼は興味本位で訊き続けたが、何故か彼らは終始無言だった。
「ほら、タコ焼きでも食べて、機嫌直して」
彼は無意識に、片手に持っていたタコ焼きをハイっと二人に差しだしていた。
彼の「友好の証し」には、サングラス男も驚いたらしい。が、
「ハ？　死ねや、カス」
そう言ってサングラス男は、タコ焼きをパックごと叩き落とした。地面に衝突したソースとマヨネーズが、べちゃり、という音を立てて彼の足に飛び散る。
「何すんねん！」
彼は怒りのあまり立ち上がった。

「ああん？　やる気か？」
サングラス男ともう一人の金髪も立ち上がった。
だが無論、タケルと彼らでは身長の差が歴然としていた。
相当頭に来たらしく、彼は先ほどから固く拳を握り、わなわなと肩を震わせた。
瞳を大きく見開き鼻息を荒くするその姿は、いささか戦いに挑む前の闘牛のようだ。
彼らは、タコ焼き一つでここまで怒る男を見たことが無かった。
気が立っていた彼は、後ろにいたチンピラの一人が愛機を勝手に触ろうとしているのに目を留めた。
「おい、そこのお前（ヤー）！」
「あ？」
こそこそと動き回っていたそのチンピラは、タケルにどやされると直ぐ、伸ばしていた腕と一緒に何かを背後に引っ込めた。
握られたそれが手機（ケータイ）だというのは、遠目からでもギリギリで分かった。
どうもＩＣチップ読み取ろうとしていたらしい。
現在大阪で販売される全ての商品には、このＩＣチップを埋め込むことが州法で義務付けられている。表面に手機をかざすと反応して、詳しい情報を提示する様になっているのだ。
例えば野菜など生鮮食品では、生産農家だけでなく栄養価や消費期限などが記されていることが多い。
だが車やバイクと言った免許や保険の必要になる大型機械の場合、会社名や製造番号の他に所有者の名前等の個人情報が上書きされるため、特定できないように暗証番号が掛けられるのが普通だった。
こいつら、この頃流行ってるバイク強盗なんか？
タケルは久しぶりに生気（キレ）た。こいつら痛めつけなあかん、その一心だった。
「我の懸浮車勝手に触るな！　紅星－３００型機が多少銭（なんぼ）すると生（おもう）覚（てるんや）か！」

「シェンフーチャー？　何やそれ？」
「身体(ボディ)に傷がついたらどないすんねや！　それついこないだ手に入れたばっかなんやで！」
「ハ？　ど、どうでもええから俺らの話聞けって……」
「別胡説(ふざけんな)！」
その時チンピラの一部が変な表情をしたのを、タケルは見逃さなかった。
だが彼は頭に血が上っていたので、気にせず思いつく限りの罵詈雑言の集中砲火を浴びせた。
「あんたら、また借金のこと説(い)いに来たんか？　そういう話はもう終わりにしてくれ。
我(オレのオトン)？？はもう死んだんや、後生世(グスーユ)に去(い)になったんや、我とは没関係(かんけいない)やろ。次から次へアホみたいに来よって……
ええ加減にせい、このアシバーが！　チュゴ！」
彼はそう吐き捨てると、薄い黄緑色の作業着を腕まくりしながら、睨めつけつつ一気に間合いを縮めた。
やっぱ力で無理やり追い払うしかない。彼は為何(なぜ)かそういう考えに帰結した。
　この頃何かとヤクザに絡まれることが多くて、うんざりしていたのだ。
「覚悟しろ、この二百五(アマ)！　何とか言ったらどうや、あぁ？」
かなりひどいことを言った積りだった。
彼らの多くはポカンとした顔のまま、眉を顰めつつこちらの方を凝視していた。
タケルは拍子抜けして、一瞬勝気な表情が崩れそうになった。やっぱ詰めが甘かったか？
しかも相手の第一声はこれだった。
「何意味分からんことゴチャゴチャ抜かしてんねん！？」
「あんた、ホンマに日本人か？」
　しもた、つい口から出てもた！　彼はようやく通じていなかった

ということに気づいた。
どうやら彼らは難波在住の外国人ではないらしい。
タケルは彼らの格好を含めて、じっくりと観察を始めた。
人数はどうでもいい。ワックスで逆立てた金髪にしろ、ジャラジャラした鏈条（チェーン）の喜平ネックレスにしろ、現代では化石級の古風なチンピラだった。
今の時代こんな服着てるのは、少なくとも日本人系のヤクザだ。絶滅寸前の。
「あんたらこの辺のモンやないな。ここへ何しに来た？」
「お前こそなんや、さっきから偉そうに」
タケルは、相変わらずふてぶてしくしゃがみ込む彼らを見下ろしながら続けた。
「ここはあんたらみたいな日本人（ヤマトゥ）の庭でも、そないウンコ垂れる厠（か）所（わや）でもあれへん。とっとと帰れ」
「自分、誰に対して口訊いてるんか分かってんの？」
サングラスが間延びした顔で挑発する。
「不知道（しらんわ）哇、？子（アホ）。人ん家ズカズカ上がり込んどいて、そっちこそ言えた台詞やないやろ？」
「お前、俺らに文句垂れてただで済む思うな！」
金髪はキレやすいのか、それだけ言うのにも少々声を荒げていた。
「よう言わんわ。妙な強がり言うてそっちこそ後悔しても知らんで、このチョーケ」
「んだと、てめぇ頭蓋骨かち割って脳味噌シャブったろか！！」
「割るならあんたの頭が先や、どうせ脳味噌の代わりに蟹味噌でも詰まってるんやろ！」

「ああ〜、失礼、失礼〜」
言い合いの最中、突然後ろの方から比較的落ち着いた、ともすれば人当たりの好さそうな男の声が上がった。
チンピラ集団の間を割って、こちらへしゃなりしゃなりと足を進め

てくる。
「流石は難波の子ぉや。俺には難しゅうて浪花口はよう分からへんわ」
訳知り顔をしながら、男は悠然と続ける。
「君が、ええと……比嘉……」
「健や」
「そうや、思い出した。比嘉健クンやな。ごぶさた～」
会ったこともないのに、その男はそう言って馴れ馴れしく話しかけた。
タケルは妙な心持で、男の様子を窺っていた。
年齢は三十代辺りだろうか。一人だけ黒白ストライプの薄手の套装を着込み、アフロヘアにサングラスを掛けたそのケッタイな風格は、少々集団の中で浮いていた。
「おっちゃん、誰や？」
「まあ知らんでも当然やわ。それは良いとして……」
「くいだおれ人形の亡霊かなんか？　喪服バージョンなんて初めて見たわ」
「あれ、中央区の観光事業の一環で一時は復活したけど……っちゅう話はまた、今度にしよか」
男はなよなよとした感じで、あくまで丁寧に、かつ気持ち下手に出た。
「ごめんな、この子たち普段から荒っぽうてしゃーないんや」
「二十歳の小鬼相手に五人でカツ上げとか、どういう了見や？」
「そんなあけすけに言わんといて。違うで、ちょっと話したいだけやねん。時間ええか？」
彼は手首に括りつけた手機と兼用にしている手表を見た。
時間が過ぎるのは意外と速く、出勤時間の8時半まで後5分を切っていた。
「生憎やけど、我朝からそこの金色の毛ぇ生えた猴子どもの相手して累れたわ」

最近遅刻続きだったのもあって、イラついてつい口走ってしまった。
「何やと！？」
金髪がこちらへ飛びかかろうとする。流石に嫌味を言っているということぐらいは分かったらしい。
「まま、落ち着いてぇな。イラチやな～、健クンも」
男はこれを制止しつつも、にやにやと笑いながら彼の顔を見つめている。
こいつら一体何モンや？　なんで我の名字知ってんねや？
彼はまだ朝で頭が起きていないにも関わらず、雲を掴むような奇妙な状況に身を置く羽目になってひどく混乱していた。
彼はただでさえ脳袋を使う仕事は苦手なのに、珍しくありったけの知恵を絞ってこの集団の正体を必死で暴き出そうとしていた。
一抹の不安が脳裏を過る。
ひょっとして、こいつら鈴木組か？
それは、先ほどから候補の中に浮かんではいた。
ないない、そんなんありえん。彼はその可能性を否定した。
それに天下の鈴木組が、こない王八蛋な日本鬼子を雇うはずあれへん、という妙な信頼感を彼らに持っていたからだった。
「あ、そうや。自己紹介が遅れてたわ。俺の名前は鈴木　賢や」
嫌な予感は何故か的中する、という言葉が今度は頭を掠めた。
その男は口で説明しながら、上着の隠しからロゴマークらしきものが印刷された名刺を差し出した。
まず目を疑った。
彼の瞳にうつり込んだのは間違いなく、黒地の染め抜きに、十二本骨の車紋――
「うちらな、鈴木組っちゅう所のモンやねん」
それは紛れもなく、指定暴力団「鈴木組」の家紋だった。
「まー、しょーもないおっちゃんに見えるかもしれへんけど、一応

はあの鈴木組総取り、鈴木　角次郎（かくじろう）の直系の孫に当たるわな」
寝ぼけてる場合ではない。目の前に居るのは、構成員数８０００人に及ぶ市内唯一の純日本人系ヤクザのボスの孫だという。三八（ろくでなし）ならぬ八九三（ヤクザ）だ。
「おっちゃん、まさか……」
「そのまさかや。どや、すごいやろ？」
ハハハ、サイデスカ……と、彼は曖昧な笑顔をした。相手の余裕の表情に変化は見られない。
「……少なくとも、くいだおれ太郎の亡霊ではないわな」
そう言い終えた男の顔の筋肉が、不自然な感じに引きつってゆく。まだ朝で涼しいにも関わらず、皮膚の表面からどっと冷や汗が滲み出してくるのが彼には確かに感じられた。
「さっきから黙って聞いとったら、調子に乗りよって……！」
ゴキュゴキュという気持ち悪い音を立てながら、男が指の関節を鳴らし出した。
不好了（ヤバいやん）、つかホンマに不好（ヤバ）い。
「ついて来てもろても、えぇか？　まぁ、君に選択肢はあれへんのやけど」
にじりよってくる男に後退りしつつも、彼はここから脱走する方法を死に物狂いで考え始めた。
しかしその時、彼の体に電撃が走った。奇跡的に打開策を閃いたのだ。
「ヌ、ヌーヤイビーガ？　ワーヤマトゥグチガ……」
「今更外人の振りしたかて無駄や。吐くならもうちっとマシな嘘つきな」
相手は俄然、彼へとガンを付けるのを止めない。
彼は仕方なく、その恐ろしく魅力的な案を放棄した。
天国のオトンへ；「絶対必要になる」とか調子こいてあんたが教えた中途半端なウチナーグチ、やっぱ役に立たんかったわ。
「？（うそ）はついてへんけど、ごめんて、いや、すんません」

「『ごめんで済んだら、警察要らんわ』とか言うて欲しいん？」
「そら、ご丁寧におおきに……」
こんな冗談が通じるはずもなく、誰もが彼の生存を疑い出したその時だった。
タケルは咄嗟に、彼らの向こう側の通りの方をチラチラ垣間見るように視線をずらしていたかと思うと、急に目を見開き、びっと人差し指を突き出して思いっきりデカい声で叫んだ。
「あれ、麻野（あさの）やん。それに南宮（なんぐう）もおるわ。こんなとこ来て、どないしたん？」
「仲間か？？」
男の声に合わせて、一斉に彼らが反対方向を向いた。
今や！　彼は、大阪五輪の陸上選手顔負けの速度で駈け出した。

ほんの数秒間の出来事だった。
タケルはまず、
？　いつも運転する時に填める耳栓を、幾つもある口袋（ポケット）から取り出してきつく填め、
？　懸浮車を押さえていたチンピラに頭から突進してなぎ倒し、
？　右手で取っ手を握りしめながら座席に跨って、
？　別の口袋から左手で出した鑰匙（キー）を挿入口に差し込む
という一連の動作を、僅か5秒も経たない内にやってのけた。
そして、彼らが異変に気付いてこちらを向いた瞬間――
バルンッッッ！！！
耳を聾するばかりの強烈な轟音が、タケル以外の人間の聴覚を奪った。
彼の懸浮車の発動機が火を噴いたのだ。
大きな音が鳴るように、わざと発動機（エンジン）の内部で爆発を起こさせたのだった。
キーンという鼓膜が破れんばかりの耳鳴りにもだえつつ、彼らは音の発生源の方に顔を向けようとするがそれは叶わない。

「まだ、ふかしただけやて」
彼は満面の笑みを浮かべ得意げに言い放つ。彼の短い人生で、これ程機転を利かせることができたのはそうそうない。
両脇に取り付けられた、まるで小型ジェット機の様な二つの発動機は、大量の空気を吸い込んでは、未だゴーという爆音を立てている。
高温のためにタケルの周りの空気は、陽炎のようにゆらゆらと歪んで見える。
「ギアゼロにしたやろっ！」
「えげつないわ！」
彼らがそう思っていられたのもつかの間。
耳の痛みに耐えかねて一切身動きがとれないのをよそに、彼はボォオオオンッ！　という凄まじい地響きを立てて軽快に走り去った。
「あの野郎おおおおおっっ！！！！！」
道路に鈴木賢の叫び声が響きわたる。
チンピラ集団は、呆気にとられたままそこから動こうとしなかったが、
「何してるんや！！　さっさと追わんかい！！」
という鶴の一声で、わらわらと各が所有するバイクに飛び乗った。

後ろが騒がしい。
あいつら、まだ付いてくる気満々やな……
タケルは今、阪神高速一号環状線の高架下にある狭い道で、大分静かになった懸浮車を走らせている。
彼はとりあえず、本来はよっぽど高速になる時以外必要にならない耳栓を外した。
そして、夕方には夜市と化すこの狭い通りの人ごみを避けつつも、彼らの追跡の具合を予測して、どこに逃げるべきか考えあぐねていた。
肌を撫でる風が、高い建物の途切れるここではいっそう強さを増す。
大楼（ビル）からせり出す様な千差万別の看板の鮮やかな色合い、両脇に

雑多に立ち並ぶ屋台から匂うに目と鼻を奪われそうにもなる。
「大阪焼Ｌサイズ」「巧克利冰淇淋（チョコレートアイス）」「特大串カツ」「芒果（マンゴー）・橙汁（オレンジジュース）」
「かき氷各種」……
日本語にしろなんにしろ、彼の目に飛び込んでくるのは食べ物の広告だけだった。
そういや、さっきのタコ焼き、旨そうやったなぁ……あんな風に放ってしもて、勿体なかったなぁ……。
……あかん、あかん。前見んと、人轢き殺してしまいそうや。
彼は悠長に走ってる場合ではないと、雑念を振り払う。
後ろからは、もう既に複数のバイクの発動機が唸りを上げて迫ってきているのが分かる。
「待て、このクソ餓鬼！　ぶっ殺したる！」
数々の男の掛け声の中で、あのアフロ男の怒声が一番耳につく。
彼は改めて、自分の後方からきゃっとか、うわっという悲鳴が聞こえてくるのが気になった。
やっぱ道頓堀に行くしかないか……
彼は臆せずその考えに至った。
すると五月蠅い車の音に混じって、今度は何故か祀仁（サイレン）の音が遠くに聞こえ出した。
次第に音量を増すその音と共に、赤色の光が視界の端を掠める。
警察だった。
「そこの車、止まりなさい！　停止？！　チョンジへ！」
拡声器のハウリングが、朝市の広がる道路沿いを掠めていく。
三ヶ国語で停止を呼びかける警車（パトカー）が、こちらへ向かって走ってきている。
先頭にいる彼をこの暴走団の主犯格と勘違いしたらしい。
まさか彼が追われているなんて、きちんと説明しなければ分かってもらえないだろう。
こら、厳重（エラ）いこった。加速違反なのは確かやけど、それ以外は情状酌量してくれへんねやろか？

彼はとにかく、加速度を最高値にまで上げた。

タケルの前方に橋げたが全貌を現し始めた。
景色は開け、淀川と比べると大分幅の狭い川が眼下に流れている。
河川敷や川沿いの建物は、何十年も手入れがされていないような古さが目立った。
ざっと見機能してそうなんは、湊町料金所と言ったところやろか。
にしてもボロい橋ばっかりや……。
彼は道頓堀の惨状に改めて気付かされた。
だが彼は、ところどころ道に穴があいていたり、柵が壊れたりしている崩壊しそうな橋を選ぶと、構わずそれ目掛けて進んでいった。
一方後ろからは、相変わらず何台ものバイクや警車が追いかけてきていた。
バン、バン、バン！
手槍（けんじゅう）が道路の混凝土（コンクリート）の表面に当って弾ける音が響く。
手槍その物はあまり珍しくないので彼は振り向きこそしなかったが、撃たれるのが怖かったので後視鏡（バックミラー）に映し出されているそれをハッキリ見た。
一般の乗用車や鈴木組の連中に交じって、警車に乗っている若い警官の一人もこちらへ向かって発砲しているらしいのだ。
おいおい、と思いつつも彼は青ざめた。
我は不法滞在者やないし、告訴（うった）えたら確実にオトンの借金返すのにちょっとばかし足しになるぐらいの賠償金は手に入るな。
まずは生き延びなければと、彼は信号を無視してオンボロ橋に突っ込んだ。

ほんの一分にも満たない出来事だった。
ピカッという閃光が、タケルのボサボサの黒髪が茂る頭上に降り注ぐ。
頭が焦げそうなぐらい暑い。

七月に入ったばかりやっていうのに。
タケルの車は太陽の下に晒された瞬間、陽光を反射し眩しいばかりに煌めいた。
流石は新品、と感慨に耽っている暇もなく、蚊の大群が如くタケルにしつこく付き纏ってくる集団があるのに気づかされる。
その内数台は、彼の車にまるで伴走しようとでもしているかのようだった。
彼は、最早体の悪い暴走族と化したその集団がついてきているのを確認しながら、橡膠(ゴム)製の取っ手を握りしめて低い姿勢をとっていた。
あともう少し。
彼は疾走する車に、引き剥がされないようにしっかりとしがみ付いた。
　来たッ！
すると彼は何を思ったか、橋の真ん中に達したところで思い切り左へと曲がった。

ギギーッという嫌な刹車(ブレーキ)音。
横倒しになりそうになる車体。
彼の車は欄干を突破し、汚染の進んだ道頓堀の中へと真っ逆さま――の様に見えた。
「懸浮車にはな、こういう使い方もあるんや！」
　空中に浮き上がったまま彼はそう絶叫して、柵の裂け目から道頓堀へと飛び込んだ。
あっと言わせる間もなく、バシャアッという、川面にかなりの重量の物体が衝突した音が響き、水しぶきが橋げた程の高さにまで飛び散った。

　車体は一瞬、その巻き上げられた水の中に沈んだかにも見えた。
だが何せ、これは一部の航空機と同じ原理で動く小型エアクッション艇、言い換えるならホバースクーターである。

再び浮き上がった時には、膨張した炭素繊維製の黒い裙子(スカート)から大量の空気が噴出され、水面に楕円形の巨大な波紋を作り出していた。これは懸浮(ホバリング)するのだ。
だが普通、幾ら水陸両用の懸浮車とは言え、４、５メートル以上高さのある橋げたから飛び込む様な愚かな真似をする者はいない。
――比嘉タケルのような脳天壊了(ノーテンファイラー)を除いては。
彼はにやりと笑いを浮かべて、橋げたの上にいる哀れな男たちを見やった。
この一瞬だけ結成された雷族は、釣られて急停止した際に玉突き事故を起こしていた。
軽くではあるが、黒い煙が上がっている。汽油(ガソリン)に引火でもしたのか、ボヤが起きているらしい。
まああれ位やったら、死人は出えへんやろ。様子を見届けた彼は、木津川から大阪湾に出るため道頓堀をゆっくり下り始めた。
そして川に浮かぶ他の船舶に紛れつつ、そうっと姿をくらましていった。

今日は朝からロクなことないな。
タケルは暫く水上を滑りながら、これもまた久しぶりに物思い耽った。
奥義・道頓堀ダイブをしょうもない連中のために使ってしまったせいなのか、気分が乗らないのか、加速度は３０ｋｍ毎時を切ったままだった。
ま、地上と同じ速度で走ってもえぇけど、警察もあっちで発生した火災の方を気にかけてるみたいやし、もう大分離れたし、別に気づかれんやろ。
せやけどもう９時近いし、今天は遅刻決定やな。また叱られるわ。
はぁ……。彼は盛大にため息をついた。
まあこれから工業廃水の流れ込んだきったない大阪湾でもクルーズすれば、案外気分も晴れるはずや。勘弁してほしいけど。そう思っ

て彼は諦めた。
そして、もっと景観の良い中之島辺りやったら「水の都」気分を楽しめるんやないやろか、などと感慨に耽りつつも、この浸水の激しい地域を後にした。

「水の都」――これはかつて大阪が「東洋のヴェニス」と言われ、市内を縦横無尽に走る川と橋が繁栄の象徴とされていた頃の美称だった。
だがしかし今は、地盤沈下と温暖化による台風の多発、そして、関東・東海大震災の時の津波によって首都圏が壊滅し、近畿地方も大阪を含めて沿岸部に水没した地域が増えたため、この名前は別の意味で復活しつつある。

そう――現在日本の首都はここ、大阪府にある。
１０００年以上もの間お上を戴かなかった町人の都・大阪が、本当に都になる日が来たのだ。

慶化１５年生まれのタケルは、世代的にいえば大阪遷都世代よりは少し年上だ。
だが物心つくようになってからは、「首都としての大阪」というのを当たり前に思ってずっと暮らしてきた。
しかし苗字からも分かるように、彼は沖縄系であり、生粋の大阪人からは少し遠いかもしれない。だが彼の心の故郷は、いつも大阪にある。

その日は彼にとって非常に長い一日になった。
というのも、支店長に叱られるわ、なぜか突然幼馴染に呼び出されるわで、ちっとも休めなかったからだ。

しかし、現在（いま）の彼はまだ、今日が最悪の日ではないということを知

らない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7978j/

浪花口、エーカ？　序章

2010年10月21日20時41分発行